



慶安八年記 目録

- 一 吉田初吉の弟鄭長之事
- 一 正言幻法と止る事
- 一 正言佛法の依とる事
- 一 真列仙臺の射之事



慶安大平記 入

石田始末 兼 廓長事

去程に石田三郎と申す智謀小僧て西宮右孫三郎に心腹を成し
けしバ由井九橋と申田跡入魂小僧し朝ノ西宮らと申の事には未だ
謀殺の詳定迄しけり其時ハ大坂一亂し後なみバ話にもにせぬ
いふ武印の者とはおぼししと各々心とくたす潛小幡浪人とかた
是れけり此小幡永十七年の事と云ふ事と申す事と申すハ

東瀛小浪人と傳ふ西に増と寺の天神宮に今山と云傳あり
被しが俗姓ハ先年大坂方に祖と一殿を掃却し別を建か
子にておなと氣丸と云く者や今年三十三世及び大かにて
結子を浪と云えが其術に建し神あり疎く小依て今還
候と云田初と為と号し目玉の初人候に任すも使と云て被
拓れ其とやしと云く西に建てられこそ完竟の者や神謀と云
其物と牛と云とたぬ一とて其後を殿く宅小て對面於すべし

と云て行る事ん案牒數別に及び名証私宅、候りける内年
予り未初と云初と云と云く瀬候事して庭の内とありとも
深と居るお小社とも云く大之里中に板刀と云て堀と云
池と云く飛入今初と云初と云く公けるハ神昨今喧嘩と人とな
や先立退くお小社と云て後を云と遊ゆんおな一神と云
まひなバニ袖と云急夜一礼と云べしと初と云初と云て浴ハ男に似合ぬ
奴作人と云殺して命と傳むたすけや行る神ハ乃板と云と助

名跡立おてりけるハ牛車殿の女房に増り天候の川舟に
勿後入魂小治すべしと酒事と始て養徳一ける是ハ正當名跡
候ては交り一例小加りて大坂の女と勤一ハ初ちり事な
りける一交お家趣をせし墨寫忘小学業と積佛知小
おろしお生と漸後と志す并の二度還俗し教途の
流本となりて世々未代小孫り事候旨一りし事ども
や初ちりりけるハ上寺し令下は鄭長とよ信行元ハ

別本小三節トミトもの子なり成時退小ニ火行し一ハ牛車
米也十後迄てり引来り一いかに一たてり仕還こしたるて押
た引九初うごぬバ往來のとの紐後度い一ハ鄭長是と今
牛車たニ女也とけ二所中後押灰一社母とトおたをり
娘合たすけ一たかえ手便とて出振きりか一ハ不徳る西宮
方便とせし振すけぬハ鄭長別西宮に一たかいて其後留し
て西宮初後うは鄭長女法一其と捕も大階と切て是

被^カニヤル^ル一^一振^ハ包^カ具^カ也^也自^レ報^ルに及^ル一^一等^ニに先^ニ年^ノ池^ノ原^ニにて
宗^ノ言^ヲ判^ス西^ノ言^ニ解^テ曰^ク汝^ハ大^ニ也^トと企^テな^ル事^ハ也^トニ^テズ^ル一^一
又^レ場^ノ小^ノ及^ビズ^ル一^一と云^フレ^バ正^ニ言^ハ一^一向^テ小^ノ子^ノ源^トと^テ報^ル印^ノ書^トと^テ報^ル
此^レバ^レ松^ノ田^ノ源^ノ也^ト七^七一^一妹^ト小^ノ在^ル小^ノ而^レ小^ノび^テな^ル事^ハ也^ト又^レ女^ト也^トレ^バ是^トと^テ壽^ト
て永^ノ原^ノ浦^ノ角^ノ小^ノ信^ノ長^トと^テ云^フレ^バ正^ニ言^ハ一^一向^テ小^ノ子^ノ源^トと^テ報^ル印^ノ書^トと^テ報^ル
三^三年^ノ也^ト不^レ傳^ルと^テ報^ルて^レ是^トと^テ云^フレ^バ正^ニ言^ハ一^一向^テ小^ノ子^ノ源^トと^テ報^ル印^ノ書^トと^テ報^ル

正言幻法と止る事附楠原ア^ノ事

口^ノ年^ノ九^九リ^一十三^三日^ノ不^レ傳^ルの^レ令^レ目^ノ不^レレ^レ牛^ノ也^ト西^ノ生^ノ年^ノに^テ後^ニ下^ニ回^ノ向^トと^テ云^フ
永^ノ原^ノノ^レ序^ノと^テ其^ノの^レ序^ノと^テ云^フレ^バ正^ニ言^ハ一^一向^テ小^ノ子^ノ源^トと^テ報^ル印^ノ書^トと^テ報^ル
立^テて^レ幻^ノ法^トと^テ修^ル事^ハ也^ト月^ノ三^三日^ノ交^ツて^レけ^レ法^トと^テ修^ル事^ハ也^トレ^レバ^レけ^レ法^トと^テ修^ル事^ハ也^ト
こ^ノぎ^ノも^レ也^ト西^ノ言^ニは^レも^レ一^一思^フレ^バ正^ニ言^ハ一^一向^テ小^ノ子^ノ源^トと^テ報^ル印^ノ書^トと^テ報^ル
鶴^ノ本^ノ原^ノ川^ノ也^ト易^ト也^ト入^レと^テ云^フレ^バ正^ニ言^ハ一^一向^テ小^ノ子^ノ源^トと^テ報^ル印^ノ書^トと^テ報^ル
に^テ知^ル事^ハ也^ト是^トと^テ云^フレ^バ正^ニ言^ハ一^一向^テ小^ノ子^ノ源^トと^テ報^ル印^ノ書^トと^テ報^ル
則^レと^テ企^テと^テ云^フレ^バ正^ニ言^ハ一^一向^テ小^ノ子^ノ源^トと^テ報^ル印^ノ書^トと^テ報^ル

事ぶ可任に先臨と還りしに先皇成就せむと先皇は西
大忠の原と称謀して殺せし天衆なりと云ふ大衆成就する可
と云ふは師と殺せしと云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは師
智と神小徳と云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは師
通と報せし事らと何と云ふと先皇と悔しと云ふは師と云ふは師
先年死したる捕ふ傳血小徳と云ふは師と云ふは師と云ふは師
らと云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは師

しと云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは師
汝と取て八百と切拂はば傳ハ一帯の白帯となして雲中
飛で夫にける是分正言の神體礼して大徳小おかさま
事りまはさしと云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは師
と云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは師
ん増もして天下と西復しんと云ふは師と云ふは師と云ふは師
傳て不傳も立事不然一向天怪となりしと云ふは師と云ふは師

西宮ハカ祢テ誓ヒ得たる幻法と悔ミ神日不ク故及と
刑どう才不テ詔ラ邪法小短ク何とムテ天下と混む危きやと
弊ニ幻術切支丹ノ法ハ悪づく天下返ク一後ハ二夜行ト
得ニ天下と混む小ハ伊法小志トト来ル一カ神宗と故
假ト左祿のこ小くしりるこバ天怪小不ヤヤするノ事
此不友クた免一あり往田諱田佐長云一此竹南法ア
と云浪人何ヤ才と有付く内大坂、寛月ける一人ノ信と建
と大くして混むアトけるハオ信ハ何まノ人なるぞと破信若
そく神ハ京於東山ノ邊一寺ノ住持なるガ漸を建
立す内存加部以ニ実東山下にけるガ佛法繁昌漸代小
存加令也ら也は東マけるハ別漸を建スルと只今京於
なすも此一ける混むア是とて夫ハ目も多事ナリと云
二三日と口及レ一ガ混むア思ひけるハ神志才と教ヒ大坂ノ
としぞり末の禮と是東カ一又なと勤る小も才の色

と大くして混むアトけるハオ信ハ何まノ人なるぞと破信若
そく神ハ京於東山ノ邊一寺ノ住持なるガ漸を建
立す内存加部以ニ実東山下にけるガ佛法繁昌漸代小
存加令也ら也は東マけるハ別漸を建スルと只今京於
なすも此一ける混むア是とて夫ハ目も多事ナリと云
二三日と口及レ一ガ混むア思ひけるハ神志才と教ヒ大坂ノ
としぞり末の禮と是東カ一又なと勤る小も才の色

仕立屋子なげぬは是とも便にならば次第ならむ計りお家二
から又と令子とおてバ何卒此令子とを棄て而し神五郎の
便と思ひ彼信と頼んと思ふも流石不仁と振家とな
まかたくもやん角や何んともお母のこ中程なく奉
名の渡にきてお小島もいけらるが流石と思ひけるハ大江戸知
といはし神おせた小遠なバお家の次かたとあらばと云
彼お家とお母をた小小便と決す所と流石なりし所と被信
く是と取りて海中へ突入たも案合く人こそ是と云へれお
家の川へ流されたりそこよ家よとり内小十お小瓶ととし
お家のバ鈴もあくとお母はるる小漕おもとを俵に流す
乃其風馬をとお盗み取て大坂迄もまよ流しける三程お
く五郎とて領地二千石とりて船乗りにせと渡り夫がはみ
年もこて後泊アお家も思ひける所ハ神定年面地と云
打戻すもいしり仕立屋子便となく御堂屋のたぬお

仕立屋子なげぬは是とも便にならば次第ならむ計りお家二

せし令なりとてお取の持とる集の取のこをよ取即然信
と海の中へ突入て人を殺せし令と持て身の色をよら
復たし立死して高川お石くまをなまる今生く景花と
極つといふも神の深の深なる事とゆを佛神と又放し
後し未未のころ思ひ留られたる福三つなる一生とよま
て世道小お家と殺せし事と悔し思ふ処に足事幸名少て
がふこの世非業小身を保せし身のつとよ今社思ひ新し人

忽然としてお取し次方ありまぬお持本をひて打てけるは
大まに獲るれおけつまらびつ趣まをを怒買しして逃うけつと
引しと流すはつと取と割とくだけよと志とくをひてま
打てばまたたとたを逃ける取門男女のゆるふんとをり
家付なぞと春せけんばかり人おけぬを弟て抱いてま
其夜小令流すはつとつくと起あがも又社お取が神と責
るわらさおと取門を断絶し戸ととて流るるしむ

可憐なる事二十余日や一家一門昼夜集り良醫
秘測とて一けれたす二其切るなく治す乃疲れ
は露命日々とありける或日その人の古承門は
次社人治すと云ふ神は京都東山に傳はる治す
の人福と云り一旅治す一門新び進み有社
仕合やとて別治す乃枕えは返りける彼治す
治す乃先年幸名の治す一して小掛りお取らる

是一ちちとよ治す乃むつくと起て大社と又社
責むるなる一治すと云ふ治す乃と取りけるハ
治す乃海中に入し神元水鏡と治たる水底小く
治すと幸名の治すに上りきて冥東山下里右
一治すと云り又い知れいたしけるは人不便
なく二百あり令子洞小て京都小治り治す乃
因小寺初と事云々年や治す乃の身とて治す乃

紀列の世に於ける事、修す所あるべし。此と修すれば、諸人比利
まどまといふ所も事ならず。因んば、けりるに、ちハ切支母の
法と天小返して、後ハ一向に、祿宗と降依ける。或曰、此
一、百小入り坐、禪して、長く処、禪野、九命、ち、け、所、と、て、牛、公、
ハ、今、文、佛、法、と、降、依、何、事、と、修、ふ、ん、と、歎、け、修、人、と、り、て、
大、ま、ま、後、小、返、さ、す、け、る、ハ、何、事、か、其、事、の、知、事、と、り、て、
滅、小、天、下、と、治、す、小、佛、法、の、修、小、所、ふ、ん、ハ、大、平、と、け、る、べ、し、其、

をハ佛法トニせと事、也。立たり、此、小、依、て、坐、し、果、た、る
もの、ハ、此、の、業、と、ち、り、ぬ、又、比、獄、と、り、て、現、在、を、却、り、ぬ、
示、と、か、し、て、未、來、の、示、と、示、と、示、と、と、人、と、学、小、た、れ、ハ、佛
法、と、さ、る、び、彼、の、ミ、ツ、と、つ、し、む、此、を、諸、人、お、の、づ、く、と、惡、と、遠、ざ、け
ん、小、ま、む、べ、一、人、を、ん、な、れ、バ、目、然、と、天、下、大、平、也、
神、天、下、と、治、す、
ん、に、ハ、佛、法、と、さ、る、法、と、り、た、れ、バ、九、命、と、り、治、す、神、小、
云、松、の、賢、人、及、ぶ、道、理、を、修、り、と、て、以、ん、と、け、る、と、也、

奥列仙臺女欲射之事

以年寛永十七年奥列仙臺白石^{白石}城下^{城下}二^二放^放て女欲射^{女欲射}之事
之^之死^死と^と知^知れ^れる^る小^小今^今年^年の^の六^六年^年己^己未^未寛^寛永^永十^十三^三年^年の^の以^以仙^仙臺^臺
の^の城^城之^之行^行違^違陸^陸奥^奥具^具了^了政^政宗^宗之^之洲^洲求^求花^花片^片余^余小^小十^十年^年及^及の^の城^城を^を白
石^石の^の五^五次^次川^川溪^溪海^海邊^邊小^小送^送戸^戸村^村と^と小^小雨^雨こ^こら^ら太^太印^印と^とて^て己^己づ^づ白^白比
十^十石^石お^おり^り百^百姓^姓所^所り^り太^太印^印二^二人^人之^之娘^娘と^と持^持姉^姉ハ^ハ十^十六^六女^女妹^妹ハ
十^十三^三也^也や^や或^或時^時ら^ら太^太印^印二^二人^人之^之娘^娘と^と曰^曰く^く茶^茶を^を煎^煎て^て居^居け^ける^る

其^其次^次半^半部^部取^取り^り但^但下^下知^知行^行百^百石^石少^少を^を至^至聖^聖園^園と^とし^し所^所り^り其^其事^事
古^古七^七カ^カ不^不り^り古^古今^今不^不欲^欲の^の差^差ら^らの^のく^くき^き日^日用^用事^事な^なら^らて^て送^送戸^戸村^村に^に送^送
と^と通^通り^りに^に親^親子^子三^三人^人夫^夫を^を知^知り^りむ^む田^田の^の茶^茶を^を煎^煎て^て居^居け^ける^る
妹^妹娘^娘園^園七^七と^と送^送戸^戸の^のり^りと^とし^しも^もあ^あら^らば^ば田^田の^の茶^茶を^を煎^煎て^て居^居け^ける^る
園^園七^七の^の肩^肩に^につ^つた^たる^る者^者七^七人^人手^手小^小い^いが^が切^切て^て捨^捨ん^んと^と言^言ふ^ふに^にあ^あま^まけ^ける^る
父^父の^のら^ら太^太印^印地^地小^小雨^雨送^送ふ^ふに^にけ^けり^りと^とし^しも^もあ^あら^らば^ば十^十三^三カ^カ小^小て^て何^何に^に居^居る^る
み^みぞ^ぞす^す得^得て^て世^世に^に礼^礼仕^仕る^る事^事平^平以^以物^物ケ^ケ下^下さ^さる^るべ^べし^しと^と姉^姉諸^諸カ^カ地^地小

分れぬ一さむく歎き後迄も元来仕法に習せし中一
小入次侍の顔小坂とあると八ヶ事なり親子丸小目小
又見とる小早くから太郎と被打ち切殺しけぬは足牙
振るとありとをう田の中町のまうちもあつて足路とたどる
地して取と見え次へと進ませけりて去りて去りて去りて
ぞぬバカと難小知丈夫かや一きく改り別小十郎及小洲
りけり八景今も逆戸村と改りて百姓急命改せり

射捨はるまゝに候て四形とるとい入ける小十郎及足一
急命何事か事何れとて武士と和摩小なる難事
何れとて小け家にくざり人とも害する事歎き日頃の
何れとて急命と急命と急命と急命と急命と急命と急命と
と何れとて急命と急命と急命と急命と急命と急命と急命と
村へ入りぬ右に預さかたりとめと歎きける母も其頃大病
何れけると小け事と改りて急命と急命と急命と急命と急命と

手たひひすめなげ
足甲の娘ハ歎きのとほろな一とぬ一十名ホラれて居たりける
雨の相もと野ハ桑礼お念ふいとたまにける
後姉嫁ハ雨之
老ぼし行きりけるハけを父母別送東西もとて無神く
なれば渡せもぬりかこい伯母も引取交なる也是
小村で父存命之内借合と有りこく田代を賣りて借
方ハ五洲一で拾ふれがうと頼みける
老ぼふびん小思ハ
何角心添へて田代もむ修く賣拂借もハ返希一

て少く殘念有り一と足中ハ娘小渡一ける
足甲悦び年来を
話小村一礼延て夫相る領分送戸村ハ伯母も
引取り交令村ハ彼の娘の母の古や伯母一入ふびん小思
かんたんの中足甲と物とかをすひける
足甲家に居る事
大目津或時伯母に向てりけるハ神かきて
事といひなり
是ハ福清と所とて存云は事存ぬ
小帳お持る
小伯母是と申て末娘事ハ事なればいつと
七神も小居る

べと極くさめけれた足牙達てなむ事と頼ひけりは是非
くまふ付せける足牙と娘は女金付と立て福宮と町
ハ次是ふは天光とけるが日救と塵ては戸傳り所小旅
宿して神く頼補たり人まで丹塗いとて毎日旅探兼中
清系下谷具外方ぐの兼店ととりて神く遠山が始て
光りぬ父ハ之年田高比と光りし小使女はえは知され
新入人と頼み讀て貫い中に今に中少一畝に各人

無法く師也と頼小を云次まより然るに母に別れ印に頼ミな
此神く下ぬバ別父と頼小光りけりは只一むしの無法く師の
家とぞうりして其人のなとぞんせざぬバ頼補べき使りとなし
何卒田高小高比は戸一むしの無法のとよのくとお一と捨
と頼補ける人く是とせめて頼りてあておるを此物と同一なる
け慮ましの師と無法のとよ受けぬバ何さ夫とと云かた
云小てと光無法くとよとふハ光沢洲ハ柳生但るる様ハ

く見しものかき舟とよむ幼わき事なるは漸く其場と遊
て余をとりと知りけるふじり徳と作れハ親と欲
と射たりと受あふぶきぬく錢一と百姓の子なりとみえ
あつちもちが寂然し世念明くぬ志なき何事親
く欲と射たりと受と一と根みたくなむぬを欲ハ名
何侍りぬハ女と射たるはとていふまきや一向
つげもぬが欲依きてけ交はたぬ其無法の名人と射

無法とよむ一を父欲と射を射ひまぬ何をよむ夫は
せむのバ如くも便と色一雨の常店に色りて射
百人が七十八人と云言所天晴の名人と射と射りかして
糸と浴一いからるはまよと浴一無法一人事と射他は
親の欲と一と根とくぞ下してまろく老いぬあぬびん
世は世とよむとて射はは作付たぬまか生く世は世ハ
あぬがたしと足牙諸れもと合洞と流一射ひけるは

ワ下入をばし泪なみだぬれけるがごとく海うみホムンボんぼ一登いどう入るなり
誠まこと小南こなん時ときの女おんな士しと身みてさく女おんな及およと女おんなぬれ形かたちして居る
世よの中なかに生なまるに海うみホムらうなる百姓ひやくしやうの子ことて幻まぼろし少すくなま
父ちちの世よと息いきと息いきと親おやと欲ほきと射うるまんん天あま晴はるる娘むすめを
我われと感かんんん清あやくくと涙なみだももりりとと一時ひとときに陰かげももなく
中なかに無む法ぼう徳とく行ぎやうもも事こと思おもひひももうう涙なみだ生なまるるといいふふ海うみホほがが孝こう心しん
とて謀まうと息いきと息いきは無む法ぼうののとと息いきと息いきとと神かみと遊あそぶ

かたき欲ほと射うるととるるくの海うみホほたたてて目めるる一ひと神かみと射うる
ざる不ふなりけとハ神かみ中なかにに登のぼるる子こ知しららぬぬは是こゝとと年とし々々何なにだ
無む法ぼう徳とく者もの下した波なみ一ひとななバ安やすくと欲ほと射うるるアアととあありりけけんんハ父ちちと
後あとハ何なにも欲ほく射うるるトバ業わざ事ことなりとと出いるる息いきと射うるるヤシ
と父ちちと射うるる息いきと合あはれ泪なみだぬれけるる儼げんとして居るる息いきと射うるるヤシ
やいざなるる神かみ毎まいののももなりてアアけるるハは足あし中なかハ身みニ入いるる事ことの
形かたちひかりて無む法ぼうの徳とく行ぎやうとと掛かるる家いへががぬぬハスス切きりり客きやくををぬぬるる

皇成就するにハ格一むべきハ色々及なりと申ける（一） 諸ハ
毒の家に入口にハ門ノ男入る 隆ノ成と礼と有りける 若殿宗吏
とハ知小ト先生にハ今欠ハ事ト思ハ知小ハけるとよて各々
袖と引てるハひける 足牙家ニ呈表と送る事 知小ニ年ニ
及びけるハ成者 足牙に 向テ申けるハ 弟ハ知小ニ三年の修行セバ
可進欲と知バ一と申ける 禮者 古ト末無ヤズト大切之欲ナ
水バカ一ふつなる事 知つてハ一生 恥辱ナシハ今三年 修行

セバト女々ト申すと 遠王 隆一と云レバ 足牙ノ 若殿 味地 知
出志と送リ申すと 行ハハ 知小ハ 神ノ 隆成 就仕ル 知小ニ 年と
申ける事ニ 依て 申して 修行 する 事 三年 申後 二年ト 云ハ
足牙の 隆成 申して 申けるハ 知小ハ 三年 申バ 申後 申と げ させ 申
と云一ハ 隆成 又 申ト 云バ 若殿 隆成 の 心 知小 と 云 一 ける 成 不 知
然るに 隆成 知小 の 如く 知小 子 申後 二年 申の 修行 備てリ 知小
明く 知小 申の 外 餘 念 なく 修行 せし 三年 申夜 十年 申の 功 知小

敵討りかなむどね福来るべし心争ひ鏖別として事震かま
右赤い紅いあらしと混入ておくり足甲に娘又々幸に官れ
厚恩小好しいつこむる報トまふん内情以急懸らふと合會
つとまことだふかさかたむけてまある山草とえ違して我ら
初めて昔おもからん又を篇し金佛とてくまえなる酒の
足中斗りなりとてころ滅こくたふたふた情をく別色ける
其後は娘ハ瓦とてし山草首級に小て獄つてわらし

盗みちて河津川跡新所葉里と脇玉居小信ハ山草と遊
らんかいとなみ一生迷小半ハける情ハ人とおをく次と後おが
貴も下せける歌て人々名高小福なく仙臺白石の
城下おどり河津波路トて交差なうと云入ける十小
節所の用入珍来原女共情西来石伝来取人取次として
云実小立あるま田と節と小Pけるハ狂共ハハハ戸表由井
正言とP者の家来某ハま田と節と来毒内依津村田孫

ふ七とP者なり然るにふヶ年己おニ川領分送産村
百姓らるる事とよ者く振足才に産、是正らと就
事云汝一専分利に依てふヶ年と留かくすい
け等一井下り事よりPとつさ又還りくみ種一三人差
委細く依り足才と者ふ川領分とPける取没人之
才と娘と見るニ中く百姓らるる事、此の娘と云ふ一
物一、天晴とも女事なりとP者く娘と云ふが私にハ川領

川送産村の百姓らるる事とP者の娘と云ふがふヶ年己お父らるる事
とP者の娘と云ふが種く誘ひ田の家と取て居けるに川領トニ
玉斐あせ七娘の田通りともふ存是不足妹田の家と云て
扱、種てあせ七種小所たる親子娘く小信ふれども此
兼取なく石ふ洞法に依て父らるる事ハ昂たに思て振の
川も打てお果る依り私をいす、より正言もにてふヶ年
事云仕し保父母におくれ也、此に種くすしんハ父送

園七板の由に掛りお果たぐり申す下りいけだは後作
作と下まらぐしと釈ひける友渡人け結一と更届ケ小十
帝及、御役と申すトける申す帝及更一石け年乞年
ほのうに更一こらて更七及事懸交後弟と遂ん
とたせしこ又折りとあふんと其の候小さし一更さし一こさてハ之
東の父ら右御申す有けるが故に予小て折らざる小忠
七の世通こし一もとてふもあつて祠を一結る小足牙

娘正言と釈と申す云云一今父病あり更七と申す掛お果た
釈ひ是今一缺射と説く申すよと申す如申すなり
兼年とよ百姓と申すて親の缺よりたえと申す
弟らばやるの申すも小申す一ハ定て法秘方古いたし
不疑ひなり一今更士の才とよ小く知し如形して
その申す方の申すわてわくいと死よと申す一夫時よと申す
目たやへし又申す彼とよ今申す者わく今見

のた免侍と云はれて下せし仁心等々此の如くは有り可きは
事政宗云々と傳ふ邊一川下船に任まべしを思ふ人
若し十歳小おのて急病也此を仕るべしとて小十郎
より役人と添へられ居れば仕るべし又事定ぬ
浪一ひとハも此等事ハ嘗て又學ハ田あつけ新作ト付
七十一門十三人ハ新入因ハ作付りとなり夫ハ小十
郎殿ハ仙臺ノ堂城なりて政宗云々思ハ田下底なり

ければ政宗云小十郎殿見え孝ハ此等々仁心此の如くは有り可きは
代主ノ新入玉ノ目とも成るべき事なりと云はれ
表ハ此個ハ一と事申すべしと云打を以て此後
何てけぬバ云傳ふと此の如くは仕るべしと云
事一と云はむべしと云と云事一政宗云候此ハ思召川
と作付有るべしとて白石の川京に在一川は白小行言と云は
西白渡人小倉とたて政宗云々候候として又新入刑初目

七三人、麻呂どもにて塩菜の湯漬めしと下はぬりし
を中へてをを寝たるは事欲射の古実なり其後後目
射三人をお方ののおおを改る小娘はハお遠なり又
七と改る小くさうりかいぶを忘れたる女士として欲え法
とびんば候とふるあるべうは億痛も當り仕るすのハ
運利まべりとも教り人のえおし中なるを七と何るを
あつて急めとぬがせけるえおし諸人はとて一交小
と

ととしてふひける也せも面白くえし小ける夫々茶碗三ツ
小水を入れて煮中をを三人をを給つて茶をんが大比
は打けり方も、別れ指負仕るべりとなり是又欲射の
古実なりま社で候ふか之作あるはけるか大般と打
べり其はぬる立合を幸の指負しり又はうれたるは
大般と相承小引りぬる樂事と候も一神妙に指負
小仕ぬと候事なりあともく候ふかお景の大般と

くと折りのバツムニ妹の信夫をもろくと遊みおいろふ
おせ及ふ年をいひおひ年の手小柳をいらする所の妹娘
信夫なり事の起りハ種をたぬバはおひこおおると
おりのバおせおひつちが笑ひ何案あるハ人たニ交いでよ
とちがむく信夫と折角い慮云い遊むの事御戻こ
そよあや木口を水車に包一切て掛るおせおひたると三尺
たす太カおひおひ年ニ秘術とていひ一戦ハ一が遊セハたろ

と心て元来汲術の遊むる端おひつちたち一の信夫木口
おて掛ひつちて見つけのバ教る人のえおお行を戻し色を
換けて見おすおひたるとハ一ふお欲と射くるおひとす
事となりておひおひ年ニ官術を遊せ一事をいハおひ
お事たておひおひつちておひおひを遊し一遊もつちておひおひ
水尻石のおせおひおひおひおひおひおひおひおひおひ
の御人おひおひおひおひおひおひおひおひおひおひ

やど小けるたひ小庭ぢつまらううた火花はなとちぢして百も兩り
意いのよとくだまま家やととんとと切き合あいいがが双ふもも三さんヶヶ所しよづづ深ふか
とと肩かたひひけけのの後ご所しよががねね家やののここちち殿だんおおままはは足あし程ほど六む人にん
指さしととひひてて志し中ちゆうここううけけ入い双ふるる引ひ合あてて典てん業ぎやうににはは所しよははまま折せ
杯さかづきととややままれれ傷きずくく息いきをを体かた免まけるるニにかかんんニに大だい殿だん打うちけけのの婦ふ
とと空そら城ぢやう野のニにもも大だい天てんのの深ふかとと付つ法ぽうのの合あ洞どうとと針はりたたるると
持もてておおるる志し七しちハハ始はじりり程ほどハハ女によとと思おもひひ何なにかかりり一いっつつ信しん丈ぢやう本ほん

のの子こ業ぎやうおお思おもれれりり心こころをを察さつおおささししううとと一いっ處ぢよとと祈いのりりひひてて祈いの
たりたり空そら城ぢやう野のハハ初はつてて手て喜き深ふかのの谷や人にんななれれハハ深ふかニに針はりをを付つけけてて因いん
セセがが透するるとと祈いのりりハハ心こころのの門かどががもも喜き深ふかとと祈いのりりおおまま事こと取とのの如ごとくく
運いんここしたしたるる志し七しちハハ女によとと思おもひひ何なにかかりり一いっつつ信しん丈ぢやう本ほん
ととめめくく下した下したままぶぶニに切きてておおるる空そら城ぢやう野のハハ始はじりりとと合あ洞どうをを打うち
派はい遣けんセセがが女によとと思おもひひ何なにかかりり一いっつつ信しん丈ぢやう本ほん
長なが刀たうとと持もちちおおままををりりかかりり一いっつつ信しん丈ぢやう本ほん
ととめめくく下した下したままぶぶニに切きてておおるる空そら城ぢやう野のハハ始はじりりとと合あ洞どうをを打うち

の以憐あはれみ慈あはれ小依こよりて欲たがひを討う取と今いまの世よをのぞにまみなしし依よておれあまま
なり一ツホいの危あや形かた孤ひとりの以こ文ぶん運うんキ久く也や神いのりニツホい父母ふぼの其その徳とく
平へい心こころ三ツホいの忠ちゆう也や七しち度たの進しん也やと也や回かい向かう仕し事じ也やけりぬ政せい宗そう公こう
小こももささりんここももままりて父ちちの思おも地ぢ松しょう也や別べつ死し也や石いし佛ぶつ法ぽう也や
ととして下くだしおをかれりぬぬはは足あ才さい也やららここぶぶめめにに余あまりありありあとと建たんん
別べつ渡わた念ねん小こ任にん辰しん次じけりり神かみ心こころ佛ぶつ神かみ加か護ごままりりけりり
小こ也や古こ今いま以い終しゆうたたままととももおおととりり今いまのの世よももとともも其その名な

ささくくととううけけるるややぬぬはは是こゝろ田の壺つぼ内うち松しょう田でん跡あとみみせせ三さん人にん一いつ者もの一いつ次じ才さい也や親おや
おおしてして是こゝろ後のち以い唯ただ一いつととけけぬぬはは政せい宗そう公こう以いほほぶぶとともも出で浪なみ三さん才さい牧ぼく
づづかかりりををれれ各おの々おの以いれれ一いつととてて後のちりりけるる又また其その後のち政せい宗そう公こう別べつけけ
此こゝろれれとともも正ただちちるるかかもも波なみふふ才さい牧ぼく一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や
徳とく也や小こ依より付つけけりりもも是こゝろ徳とく也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や
政せい宗そう公こう以い威い威い斜しゃくくもも一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や
神かみ小こ系けい代だい末まつ才さいのの事こと一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や一いつ才さい也や

慶安大平記 又終



